いずみさの昔と今 第329回

「泉佐野の近代化②」

明治14（1881）年2月7日、堺県が大阪府に併合されたことによって堺県会も廃止されましたが、それ以前に大阪府会は区部会と郡部会の分離が認められ、それぞれの部会に属する事業は各部会で決定されることとなりました。では、泉佐野ではどのような村政がなされていたのでしょうか。

明治18（1885）年6月、明治大洪水と呼ばれた淀川の大洪水が発生しました。この洪水により、枚方周辺の堤防が決壊して大阪市街にまで浸水し、多数の死者・行方不明者が出るなど、甚大な被害がもたらされました。この事態を受け、淀川改修を求める声は一挙に高まり、当時の知事である西村捨三は、明治13（1890）年1月の臨時部会に淀川改修計画にかかわる測量費の議案を提出することを決定しました。しかし、それに対し、和泉四郡の有志者たちは、「帝国議会開設直前に急いで議決する必要性はない」と延期を主張しました。そして、それが聞き入れられない場合は堺県の再設置を政府に請願することもあると訴えたのです。これは、地方税である府税納入に見合う行政支援を受けていないと感じる、旧堺県に属する和泉の町村民たちの意向を敏感に反映した議員たちの動きでもありました。また、郡役所の新築をめぐり、岸和田・貝塚・佐野の争いも激しく行われました。町村制施行時、（旧）岸和田町・岸和田浜町や貝塚町と比較し、佐野村は最も大きな人口規模をもっていました。そのような事情もあったからでしょうか、当時、すでに郡役所の移転、新築が岸和田城内で工事着手されていたにもかかわらず、佐野村の有志者たちは自村内での新築を訴える府庁への請願を試み、請願書に郡役所の奥書を求めました。しかし、この要求は郡役所から拒絶されたため、貝塚町の有志者と連合して岸和田に対抗する計画までも立てられました。この紛争は府会議員の斡旋もあり一応終息を迎えましたが、佐野村の有志者のなかに内務省に請願する動きがあったことや、混乱のなか新築費用の寄付金が集まらないといった事態も招くなど、泉南地域の大きな問題となったことが当時の新聞で連日報じられました。

このような対立は郡会でも起こりました。大阪府第六尋常中学校（岸和田中学校）が明治30（1897）年に開設され、その後、女子教育の充実を求めて郡立の高等女学校（泉南高等女学校）設立が郡会で議論されていましたが、その立地をめぐり、佐野は岸和田と争うこととなります。結局、交通至便という意見によって岸和田への設置が決定されましたが、その後も女学校の運営経費支弁や移転改築をめぐっても同様の紛議がもちあがりました。

近代化に向けたためまぐるしい変化に対応していかなければならなかった明治時代、泉佐野においてもこのような地域の利害をめぐる対立がたびたび起こっていたのです。

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日　月曜日、毎月最終木曜日（いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料　無料

日本遺産・北前船文化を巡る⑭

～番外編・佐野町場の車道～

JAPAN HERITAGE
日本遺産

「日本遺産」に追加認定された「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～北前船寄港地・船主集落～」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

問合先　文化財保護課

「左大川」と刻まれた道しるべ

迷宮都市と呼ばれる佐野町場は、古い小路が複雑に入り組んだ在郷町です。

江戸時代には海に向かう「車小路下り道（車道」「向日出下り道（向日出道）」「野出町下り道（野出道）」の3つの道がありました。現在のつばさ通り商店街を通る孝子越街道から海岸へ抜ける幅一間半（約2.7m）の細い道が、当時の流通を担う主要な道であり、最も歴史的な雰囲気を残す道です。

特に車道（くるまみち）は荷車がガラガラと通ったメインストリートで、上善寺の裏側を抜け、味噌・醤油・麹を扱う元食野家船頭の熊文商店、かつての西村神社、浜出神社に接していました。その様子は、西村神社の石柱2本と梅の橋が現在も残されています。またこの道沿いは、妻入の有力な商人の民家が立ち並ぶ浜出町と呼ばれていました。緩やかな下り道の交叉する場所には、今も道案内の道標がひっそりと残っており、「左大川」「右大坂　左犬鳴」と刻まれています。